

1945年三河地震による災害と海軍基地の対応について

名古屋大学 災害対策室* 林 能成, 木村 玲欧

Disaster Response and Relief of the Japanese Naval Air Station in the 1945 Mikawa Earthquake

Yoshinari HAYASHI and Reo KIMURA

Disaster Management office, Nagoya University,
Furocho, Chikusa, Nagoya, 464-8601 Japan

This study clarified response and relief of military forces in disaster situation analyzing the interviews of victims of the 1945 Mikawa Earthquake. We are focused on the Meiji Naval Air Station located in the severest damaged area of the earthquake. In the adjacent villages of the airbase, over 70% of houses collapsed and many people were crushed under houses. We derived some useful actions operated by soldiers of the station from the interviews of 2 officers and 3 inhabitants. When the disaster occurred, some villages became isolated geographically and responded and recovered by themselves for few days. If there had been organized many staff in the villages and supported relief operations under the situation, the operations of disaster response and recovery would have practiced effectively and efficiently.

§ 1. はじめに

三河地震は1945年(昭和20年)1月13日午前3時38分に愛知県三河地方で発生したマグニチュード(M_{jma})6.8の地震である。愛知県ではこの地震の37日前の1944年(昭和19年)12月7日に紀伊半島沖を震源域とする東南海地震(M_{jma} 7.9)でも大きな被害が出ており、連続して二度の震災に襲われる事態となった。この2つの地震はアジア・太平洋戦争の末期に発生したため、60年前という比較的最近の地震であるにもかかわらず、その被害の様子に不明な点が多いことが知られている。戦後30年以上たった昭和50年代になっていくつかの精力的な調査研究がなされ、飯田汲事著『昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布』(1978)、中日新聞社会部編『恐怖のM8 東南海、三河大地震の真相』(1983)、山下文男著『戦時報道管制下隠された大地震・津波』(1986)、などが出版され市町村ごとの死者数など多くの事柄があきらかになった。しかしながら、戦時下の災害対応の様子などにはいまだ不明な点が多数残されている。

また、この2つの地震では被害の様子を伝える写真が、戦時中の報道管制とフィルムなどの資材不足のため極端に少ない。地震などの被害写真は一般市民レベルにおいて災害を伝承する最有力の資料と認識

されており、明治時代の濃尾地震(1891年)や大正時代の関東大震災(1923年)でも何枚かの象徴的な写真が残されている。それらの写真によって、これら大災害は現代においても視覚的に全国レベルで市民に伝えられているが、三河地震ではそのような写真はきわめて少なく、地域内における災害の伝承に苦勞している現状がある。

そこで我々はいまだ明らかになっていない三河地震の災害対応の様子を明らかにするためのインタビュー調査を行い、あわせて地域に埋もれている被災写真の発掘や新たな視覚災害資料の作成を進めてきた[木村・林(2005)]。これまでの調査は三河地震による死者数が最も多かった市町村である愛知県碧海郡明治村を中心に進めており、本稿執筆時点の2005年12月までに14件のインタビューを終えている。この明治村には三河地震が発生した当時、海軍の明治基地という隊員数4000人規模の航空基地が設置されており、今回の調査でこの基地が周囲の集落においていくつかの災害救援活動を行っていたことが明らかになってきた。本稿ではこれまでに起こったインタビュー調査の概要を記し、それらを総合的に解釈することで明らかになってきた1945年三河地震発生直後の災害対応の様子を示す。

* 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 環境総合館

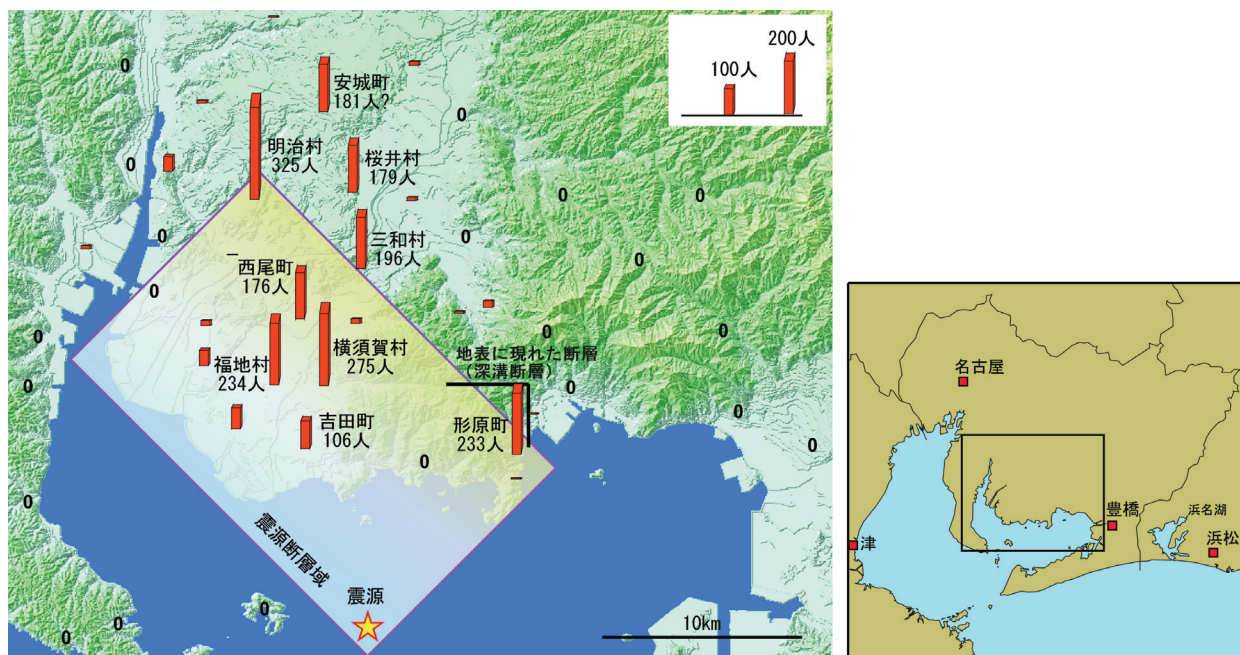


図1 1945年三河地震による市町村毎の死者数

Fig.1 Number of casualties of the 1945 Mikawa Earthquake classified by municipality

§ 2. 三河地震による碧海郡明治村の被害と明治航空基地

三河地震による被害は飯田(1978)によれば、死者2,306人、負傷者3,866人、住家全壊7,221戸、同半壊16,555戸とされており、マグニチュード6.8という規模のわりに被害が著しく大きいことが特徴である。

その原因としてはいくつかの要因が考えられている。まず、三河地震以前に多くの建物が損傷を受けていたことが指摘できる。この地方は三河地震の37日前に紀伊半島沖を震源とするマグニチュード7.9の東南海地震で震度6あるいは震度7の揺れとなった[飯田(1977)]。たとえば幡豆郡福地村では家屋の46%が全壊しており、21名の方が亡くなっている。また一色町などの隣接する町村でも10人近くの死者がでていたところが多く、この被害状況は東南海地震における愛知県下の被害では顕著なものである。この強い地震動のため、全壊・半壊にはいたらなくとも、柱とはりの接合部である「ほぞ」などが壊れてしまった家も多かった。これら家屋が修理されないうちに三河地震の揺れを受けて、簡単に倒壊してしまった可能性は高い。

また瓦屋根が普及していたという家屋構造上の要因も指摘されている。愛知県三河地方は「三州瓦」の産地に近く、瓦ぶきの屋根が普及していた地域でもある。このことは農家でも例外ではなく、他の地方ではかやぶきの屋根が主流であった昭和初期に既に多くの家で瓦屋根が普及していた。一般に瓦屋根は

重く、地震の揺れには不利な構造と言われており、この地方の多くの家屋が全体的に耐震性に劣っていた可能性がある。

そして戦時中という社会情勢そのものが、被害を拡大する一要因であったと指摘されている[山下(1986)]。東南海地震で被害を受けた家屋の修理が遅れた原因は、材木や釘などの資材不足が顕著であったことと、修理を担う職人の多くが軍関係の仕事に動員されていたためである。また、集団疎開のためお寺の本堂に寝ていたため、犠牲になった学童も多い。そして災害後の救助・救命活動においては、戦場に多くの若い男性をとられていたことが不利に働いた。

図1は地図上に飯田(1978)による死者数をプロットし、強震波形記録の解析から求められた断層モデル[Kikuchi *et al.*(2003)]と比較したものである。死者が多かった市町村は形原町(233人)から、横須賀村(275人)、福地村(234人)を通り明治村(325人)にいたる20km×10km程度の狭い範囲に集中しており、これら市町村はKikuchi *et al.*(2003)による断層域のほぼ直上に位置している。

この地震では地表に断層の食い違いがあらわれている。これはM7以下の規模の地震としては比較的珍しいもので、地震を起こした断層運動が非常に浅いところまで及んだことを示している。これまでの調査をまとめた杉戸・岡田(2004)によると、その総延長は28km(陸上部約18km、海底部約10km)に及ぶ。なかでも

表1 1945年三河地震による碧海郡明治村の大字毎の被害

Table1 Number of casualties and housing damage of Meiji-mura village of Hekikai-gun County from the 1945 Mikawa Earthquake (classified by hamlet)

大字名	総戸数	死者数	重傷者数	軽傷者数	住家全壊数	住家半壊数	全壊率	半壊率
和泉	391	88	60	120	310	81	79%	21%
榎前	185	15	10	23	38	147	21%	79%
西端	509	26	10	15	145	280	28%	55%
東端	461	24	5	36	77	121	17%	26%
根崎	301	27	9	19	61	83	20%	28%
城ヶ入	288	66	50	100	182	80	63%	28%
南中根	86	22	1	7	41	35	48%	41%
米津	426	53	10	69	152	159	36%	37%
合計	2,647	321	155	387	1,006	986	38%	37%

三河湾に面した形原町から幸田町深溝をへて西深溝までの部分は最大で2m近い変位が観測されており深溝断層[津屋(1946)]と命名されるとともに、昭和50年には愛知県指定の天然記念物に指定され保存されている。

地表に断層が現れた区間は図1で示された死者数の多い市町村とは必ずしも一致しないが、これまでの三河地震についての調査研究は地表に地震断層が現れた形原町や幸田町に集中していた。断層という明瞭な地震の痕跡が残ることが、地震の記録を残すきっかけとなっているのかもしれない。たとえば形原町(現、蒲郡市形原地区)では、蒲郡市教育委員会の有志が中心となってまとめた『わすれじの記』が昭和50年代に出版され、そこには町内家庭毎の死者数といった詳細な被害状況がまとめられている。ところが、死者数が最大であった明治村(現、安城市、西尾市、碧南市)や桜井村(現、安城市)といった、地表に断層が現れなかった町村では『わすれじの記』のような詳細な被害記録が残されておらず、個々の被災者の被災実態に不明な点が多く残されている。そのこともあり、我々は地表に断層が現れなかった地域に重点をおいて三河地震についてのインタビュー調査に着手することとした。

表1は『明治村史』[明治村史編纂委員会(1966)]による、明治村の三河地震の被害である。死者の全体数など、飯田(1978)による数字と一致しない部分があるが、ここでは明治村史の資料をそのまま引用している。碧海郡明治村は三河地震当時、和泉・榎前・西

端・東端・根崎・城ヶ入・南中根・米津の8つの大字からなる総戸数2,647戸の農業を主体とする村であった。三河地震では、村全体で1,006戸の住宅が全壊し、321人が亡くなるという大きな被害をこうむった。特に和泉集落と城ヶ入集落の被害は著しい。和泉集落では全391戸中310戸が全壊、81戸が半壊という被害を受けており、88名の方が亡くなっている。また城ヶ入集落では全288戸中182戸が全壊し80戸が半壊し死者66名という被害が発生している。なお明治村は1955年(昭和30年)に大字単位で別れるかたちで周囲の市に合併されることとなり、住民投票の結果、西端が碧南市、米津と南中根が西尾市、残りの5つの大字が安城市に合併され現在に至っている。

この明治村において特筆すべきことは、三河地震が発生した当時、海軍の明治航空基地という飛行場をもった規模の大きな基地が設置されていたことである(図2)。この基地は太平洋戦争が始まる前から海軍部内において伊勢湾付近に整備する空母搭載機搭乗員訓練用の航空基地として検討が始められていたものであるが、実際の建設工事に着手されたのは1943年9月であった。その頃には戦局の悪化にともない設置目的も多機種搭乗員の急速養成を主任務とする練成航空隊に変更されており、また完成を急ぐ必要にも迫られて近隣中等学校生徒の勤労奉仕なども動員し、1944年5月下旬に飛行機の発着が可能な状態になった。そして実際にこの基地で搭乗員の練成教育を主任務とする航空隊(第210海軍航空隊)が開隊したのは1944年9月15日であった[鈴木(2003)].



図2 1945年当時の明治航空基地の様子(小山敏夫氏撮影・安城市歴史博物館蔵)

Fig2 Photograph of Meiji Naval Airbase, 1945

最盛期には零式艦上戦闘機など約200機の航空機と3,600人もるの隊員が所属していた[安城市歴史博物館(2004)]. 基地は198haの広さを持ち「北地区」「南地区」の2つの地区にわかれて管理されていた. 設置の際には明治村和泉・東端・根崎の3つの集落に隣接した畑地を強制収用しており, その結果, 滑走路6本を持つかなり規模の大きな基地ができた(図3). なお, 1945年8月15日の終戦後, 基地は閉鎖され, 連合軍軍接收部隊に引き渡された. 土地は地元払い下げられてほぼ全域が農地に復元されている[鈴木(2003)]. 現在, 当時の基地の跡地に足を運んでも, 飛行場があったことを示すような痕跡を見出すことは難しい.

§3. インタビュー調査から明らかになった明治基地による災害救援

本研究では, 明治基地内で働いていた人2名, 周囲の集落に居住していた3人にインタビューを行った. インタビューはこれまでの一連の調査で適用・発展してきた手法[木村・林(2004)]を用い, 相手の自由意思にまかせて被災体験を断片的に収集するのではなく, 被害のようすや生活再建過程を描くのに必要な要素である, 1)地震による人的被害・物的被害(家族・集落の中でどのような被害があったか), 2)地震発生後の意識・行動とその順序(地震が起きてから時間を追ってどのような意識をもち行動したか), 3)生活再建過程における支援の有無(どのような人・組織に助けられたか)の3点を明らかにできるよう配慮した. また, インタビューで収集されたトピックについては必ず「それ

はいつのできごとか」という時間属性と「それはどこで起きたことか」という空間属性を明らかにした. これまでの一連の三河地震の調査では調査結果をすみやかに市民レベルで共有するために被災体験を絵画で再現する作業を平行して進めてきたが, 本研究においてもこれまで同様に阪野智啓画伯と藤田哲也画伯の協力を得て対象者ごとに5~12枚の絵画を作成している. 以下にインタビューの概要と作成した絵画を紹介する.

3.1 小山敏夫さん

小山敏夫さんは大正12年生まれ, 地震発生当時は21歳で明治航空基地の第210海軍航空隊で整備士官(海軍少尉)をしていた. 1944年12月の東南海地震発生時は, 整備中の飛行機がユサユサ揺れたので「誰かがいたずらをしたのだろう」と思って飛行機から飛び降りたら, そのまま足をすくわれて尻もちをついてしまい, 地震であることに気がついた. もちろん基地の中には目立った被害はなかった.

三河地震のときは, 北地区の士官舎で寝ている最中だった. いきなりガターン, ガタガタと来たので, 慌ててベッドから飛び起きた. そして, 灯火管制で電気がつけられないなかで, 懐中電灯を持って格納庫まで飛んでいった(図4). 自分の担当である20数機の飛行機に異常がないかどうかを見てまわったが, 特に異常なかったもので, 再度寝てしまった. 周囲は真っ



図4 懐中電灯を持って格納庫まで飛んでいき自分が担当する飛行機を点検した(小山敏夫氏の体験談をもとに作成, 阪野智啓画)

Fig.4 Disaster Experience of Mr. Toshio KOYAMA



図3 明治航空基地位置図[安城市歴史博物館(2004)から転載]

Fig.3 Location of Meiji Naval Air Station (Anjo City Museum of History (2004))

暗だからそのときは周辺がどうなっていたのか分からなかった。翌朝起きたら、「救助隊発動！」という号令がかかり、何だろうなと思って、ひよいと窓の外を見たら、いつも窓から東に見えている和泉集落のお寺(本龍寺)がなかったのが被害の大きさを認識した。

所属していた整備隊では基地指令の号令に従い、200人ぐらいの全隊員のうち、半分よりやや少ない人数が周囲の集落へガレキの片づけを手伝いに出た。外の集落への手伝いは4-5日から1週間ぐらい行った。朝の7-8時ごろに朝食を食べたあと、すぐ集落へ出かけ、昼食は基地に戻って食べ、また午後から行って夕方には帰る・・・という一日だった。

地震が起きたあと、基地の中でデマが飛んだのを覚えている。「富士山が爆発した」だの「東海道線の鉄橋が落ちた」だのという内容だったが、ここは航空基地だったから地震から2-3日後くらいには偵察隊を出して直接確認して噂が否定された。

3.2 小林清さん

小林清さんは地震発生当時29歳で、明治航空基地で軍医官をしていた。大学を卒業後、海軍に入隊し、昭和18年9月に中国の海南島に配属されて戦場で経験を積み、昭和19年9月に新設の明治航空基地に転属してきた。小林さんは基地に隣接する和泉集落に家を借り、妻と3歳の子どもとともに住んでいた。

三河地震のときは家で寝ていたが、部屋の隅まで子どもを抱えたまま体を持っていかれた。揺れがおさまると「相当にケガ人が出ているはずだ」と思い、すぐに軍服を着て、「医者になる」ために兵舎に医療器具を取りにむかった。家族に被害は無かった。助ける立場の人間と一緒に被害者になってはだめである。

周囲の家々は全壊し、阿鼻叫喚の状況で、「助けてくれー」という言葉とうめき声があちこちから聞こえた。しかし「自分の仕事は多くの人を治療することだ」と思い、とにかく兵舎に向かって走った。明治航空基地の中は被害がなかった。兵舎で医療器具を取り、衛生兵を2人連れて、和泉集落の小学校に臨時的診療所をつくった。

効率的に治療するため、最初に衛生兵に既に死んでいる人を除いてもらい、早急な手当が必要な順(優先度の高い順)に治療していった(図5)。これは戦場での知識・経験がもとになっていた。治療の道具は十分でなかった。自分の手を消毒液であるヨードチンキだらけにして、傷を縫って止血した。亡くなった人は、圧死のような感じの人が多かった。その後、夕方



図5 最初に衛生兵に既に死んでいる人を除いてもらい、早急な手当が必要な順に治療していった(小林清氏の体験談をもとに作成、阪野智啓画)

Fig.5 Disaster Experience of Mr. Kiyoshi KOBAYASHI

から朝にかけて、基地の周囲の集落から集落へと回診をした。医者に診てもらったり励まされたりしただけでも、集落の人は気持ちが落ちついたと思う。

診療は地震当日だけで、翌日には基地に戻って、司令から「ご苦労であった」とねぎらいの言葉をもらった。基地の兵が地元に入って、救助や土木作業をしたり、基地の資材を使って棺おけを作るなどの労働を行った(図6)。航空基地は待遇がよかったので、食料など生活には特に困らなかった。



図6 基地の兵と資材を使って棺おけが作られ周囲の集落に提供された(小林清氏の体験談をもとに作成、阪野智啓画)

Fig.6 Disaster Experience of Mr. Kiyoshi KOBAYASHI

3.3 岩瀬繁松さん

岩瀬繁松さんは昭和2年生まれ、地震発生当時は17歳で、現在と同じ碧海郡明治村城ヶ入集落に住んでいた。職業は農業だった。東南海地震発生時は庭にいたが、ゆるやかな揺れから始まり、そのうち立っていられずに柿の木につかまって揺れがおさまるまで耐えるしかなかった。母屋が傾いてしまい、家の柱を補修するために明治航空基地の兵隊から木切れをもらった。

三河地震のときは、這いながら縁側から出ようとした時に家が倒れ、その衝撃で庭にある「もみがら」の山へ放り出されて一命をとりとめた。一方、同じ家にいた母は倒壊した家屋の下敷きになってしまった。隣組の人がみんな来てくれて、屋根瓦を取ったり、誰かがのこぎりを持ってきてたりして救助を手伝ってくれたが、母はちょうど太い鴨居の下敷きになって亡くなっていた。体には、全然、傷はなかったけど、上から押さえられてしまいだめだった。地震翌々日には城ヶ入集落合同で葬儀を行い遺体は火葬をして墓地に埋葬した。家が倒壊したため、最初は隣組同士で造ったわら小屋で暮らし、数日後に、血縁にあたる本家のわら小屋に移動した。本家は傾いただけで引っぱって起こしたが、戦争中で男手がないので、車力さんと65歳の本家のおやじさんと私の3人でやらなければならなかった。自分の住んでいた家の後かたづけは親戚が手伝ってくれたが、細かいところは一人でやらなければならなかった。

地震から2~3ヶ月後、明治村から丸太の支給があり、30km離れたところ(現在の額田町宮崎)まで大八車を引いて取りに行った(図6)。山から丸太を降ろして持ち帰ったが、製材屋がいなかったので丸太は役に立たなかった。同じくして明治村から派遣されてきた「工作隊」が家を建ててくれた。その家は、自分で土壁を塗ったり、屋根をふき直したり、増築したりして改修・改良を重ねていった。母が死んでしまい、一人きりになったので、割り当て分の米を供出できなかった。しかし、野菜を作っていたので自分が食べる分には困らなかった。救援物資として九州からもちが送られてきたが、かびが生えていて食べられなかった。他の家には衣類も来たらしいが、火事で焼けたわけではないので別に困らなかった。地震から3ヶ月後の4月18日には軍隊へ行くための繰り上げ検査があり、地震どころではなくなった。



図7 村から丸太の支給があり、30km離れたところまで大八車を引いて取りに行った(岩瀬繁松氏の体験談をもとに作成、藤田哲也画)

Fig.7 Disaster Experience of Mr. Shigematsu IWASE

3.4 岡田菊雄さん

岡田菊雄さんは昭和7年生まれで当時12歳、国民学校高等科1年生だった。岡田さんは碧海郡明治村根崎集落に住んでいて、家族は両親と姉・自分・弟1人・妹2人・生まれたばかりの弟1人の計8人だった。

東南海地震のときは自転車に乗っていた。「目まいがする」と思ったら、周囲の雨戸がバタバタ落ちていたので地震であることに気がついた。集落のほとんどの家は、この地震で柱の「ほぞ」が壊れた。

三河地震では、ゆれが来て布団にもぐったときに30cmくらいの角材が枕の上に落ちてきたため、紙一重で助かった。家は地震で倒壊してしまった。母と赤ん坊は土間に落ちたために床との段差がすき間になって助かったが、弟は土間に落ちずに鴨居と縁とに挟まって亡くなった。屋根がそのまま落ちてきて、岡田さん自身は妹と一緒に家のなかに閉じこめられたが、はがれた壁から見えた星空を頼りに外へでた。近所も全半壊して、みな自分のことで精一杯だったため助けはなかった。余震が何度も来て、地鳴りとともに地面が明るく光った。

夜が明けてからは、隣組で生き埋めになった人の救出や食物・道具の融通をした。母屋に住めないため、その日のうちに畑にわら小屋(地震小屋)を造った。わら小屋の中にはわらを30cmくらい敷き、その上にむしろを敷いた。ぬか火鉢で暖めていたので小屋の中は快適だった。

根崎集落では38人が亡くなった。東南海地震でほぞが壊れたところに、三河地震で「ドン」と一発ゆすら

れたためか、瓦もずれずに屋根がそのまま落ちてきて倒壊した家が多かった。大勢が亡くなり火葬場で火葬できなかつたため、墓地の片隅に大きな穴を掘ってまとめて土葬した。10年ほどして、木の棺おけが腐ったところに弟の遺骨を掘り出した。集落には医者はいなかった。和泉集落の医院の分院があったが、和泉集落内のケガ人の手当てで手一杯で、根崎集落の分院には来なかった。

海軍航空隊の基地に隣接していたためか、道路はすべて兵隊が片づけてくれて、地震翌日くらいには車が通れるようになっていた。また軍からは倒壊した家1軒につき3mくらいの杉の柱が10本配られたが、他からの支援物資は鮭の缶詰1つだけだった。食事は、農家だったため野菜・味噌などがあり困らなかった。煮炊きの燃料もあつたし、水も井戸で困らなかった。

後かたづけは、壊れた家のかわら・屋根土・柱などの材料を再利用できる状態にして取りだした。ガレキや壊れた瓦などは、神社の池に捨てた。また傾いた家については、ジャッキで起こして土台に乗せて、筋交いなどで補強をして住んだ。

3月ごろに工作隊が来て、6畳二間分の柱・屋根組をつくってくれた。しかし壁を作る作業などは、下宿に来ていた兵に手伝ってもらいながら自分たちで行った(図8)。地震から半年後には「家らしい」と思えるようなところに住むことができた。

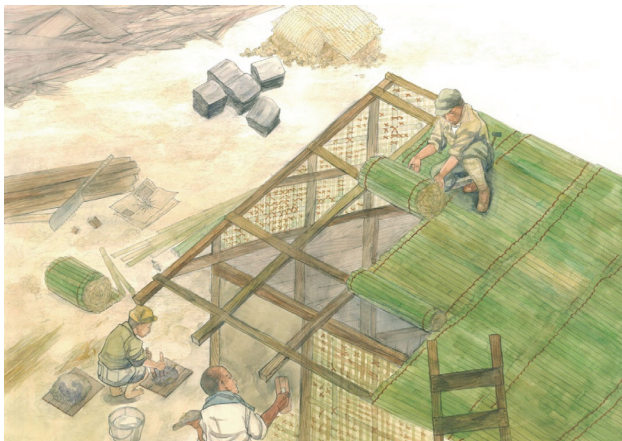


図8 下宿に来ていた兵に手伝ってもらいながら自分たちで家の壁を作っていた(岡田菊雄氏の体験談をもとに作成、阪野智啓画)

Fig.8 Disaster Experience of Mr. Kikuo OKADA

終戦後、最初は6畳二間だったのだけど、ひさしを伸ばしたりしながら、6畳、また6畳と家を増築していった。特に明治航空基地が廃止になり、その建物の

材料を払い下げてもらうことができた。明治航空基地を農地に戻すための測量については、私と同級生の3人、それに測量の人との4人で行った。くい打ちなどから従事した。滑走路は下に砂利がいっぱい入っていて本当にはがすのが大変だった。終戦1年後の昭和21年には農地に戻った。

3.5 早川ミサコさん

早川ミサコさんは昭和4年生まれで当時15歳、女学生だった。早川さんは碧海郡明治村和泉集落に住んでいた。家族は10人で、祖母・両親と自分・姉夫婦と子ども3人・姉だった。

12月の東南海地震のときは、学校から帰ってきて家族と話をしていたら突然横に揺れ出して、長い時間ユラユラと揺れていた。80歳のおばあさんが大騒ぎをして、家の外に避難させるのが大変だった。集落で壊れた家はなかった。

三河地震のときは、3人が横屋、自分を含め7人が母屋で寝ていた。訳がわからないうちに家が倒れて、わたしとおばあさんが折り重なるかたちで鴨居の下敷きになった。「苦しい」「出してくれ」というおばあさんの声はだんだん小さくなっていき、じきに絡んでいるおばあさんの足が冷たくなり亡くなってしまった。

助けに来てほしかったが、どの家も壊れているし、道具も下に埋まって真っ暗なために救助が難しかった。最終的には朝になって明治航空基地の兵隊さんが助けだしてくれた。担架がなく戸板に乗せられて搬送された(図9)。搬送されるときは、道路わきで近所



図9 兵に救出されたあと戸板にのせられて臨時診療所に運ばれた(早川ミサコ氏の体験談をもとに作成、阪野智啓画)

Fig.9 Disaster Experience of Ms. Misako HAYAKAWA

の人が「ナンマイダ」と叫んでいたのが強く記憶に残っている。小学校に医師が来ていて治療をしてもらった。右腕を骨折して骨が飛び出しており、戸板での搬送で背中が皮もむけてしまった。

母屋は南向きに倒れた。北側の庭に出る方が近いのに、ついいつも出る南側の方へ逃げてしまったため、上の姉さんと抱いていた赤ん坊が鴨居の下敷きになって死んでしまった。母屋の端っこに閉じこめられて「早く出してくれ」と叫んでいた下の姉さんは早い段階で助けだされた。家が壊れたので中庭に「わらの家」を作ってみんなで寝た。農家だったので食べ物には困らず、井戸水なので水にも困らなかった。

和泉集落では80人以上が亡くなった。壊れた家も多く、壊れなくても全ての家が傾いた。集落合同で葬式を行った。空襲警報が頻発される状況だったため火葬することができず、土葬せざるをえなかった。明治航空基地の兵隊さんとは、普段から「外泊」などのつきあいがあったこともあり、救助・救出・搬送の他に、棺おけの製作、死者の埋葬場所への搬送などをやってもらうことができた。

§ 4. 海軍基地による救援活動

明治航空基地が周辺の集落において震災救援活動を行っていたことは、これまでもいくつかの文献に記されていた。たとえば防衛庁防衛研究所が所蔵している基地の公式日誌『第二〇海軍航空隊戦時日誌』では、昭和20年1月13日の項に「明治基地附近に強震アリ。本隊に於テハ被害ナシ。隣接郷村被害甚大」「隊外震災救護ナラビニ被害復旧作業ニ従事」と記述が残されている[安城市歴史博物館(2004)]。また、『明治村史』には「応急処置として村内の海軍飛行場には多数の海軍部隊が駐屯していたから、その応援を求めて死骸の処置、棺桶の製造、火葬の始末、負傷者の手当、海軍病院の収容、道路上へ倒壊した家屋の取片付、食料の配給等について助力を受けた」と記されており、相当な援助がなされていた様子が伝えられていた。しかしながら、その援助が行われた具体的な時期や地域などは不明で、実際にどのようなことがいかなるタイミングで行われていたのかはよくわかっていなかった。本研究のインタビュー調査により、援助をした海軍基地の従事者、援助を受けた地域住民双方の立場の証言が得られ、不完全ながらも援助の様子の一部が明らかになってきた。

まず救助については、基地指令からの指示により地震当日の朝から基地をあげて組織的に周囲の集

落に兵隊の派遣がなされていた。そして上記の早川ミサコさんのように、家族や近所の人だけでは道具などがないためどうすることもできなかった災害現場からの救助に成功している例があった。基地には多くの若い兵がおり、また、のこぎりなどの様々な道具も常備されていたため、当時の地域社会では不可能だった高いレベルでの救助活動が可能となった。現在のところ、早川ミサコさん以外には救助された人の話は得られておらず、また救援活動に直接たずさわった兵の話も収集できていない。そのため救助活動が行われた範囲や期間などを明らかにするには更なる調査が必要であるが、明治村に隣接する桜井村で被災した富田達躬さんは救助については公的機関から一切の援助がなかったと述べており[木股・他(2005)]、明治航空基地による救助活動は地理的にかなり限定的なものであった可能性が高い。

また救助された地域住民に対して、基地の軍医による救急医療がなされていたことも今回の調査で明らかになった。これまでのインタビュー調査からはこの臨時診療所の開設は組織的な行動というよりは、一軍医の機転と使命感によってなされたものと考えられる。インタビュー調査の対象者である医師の小林清さんは4ヶ月前まで海南島の最前線にいた経験に基づいた診療を行っており、医師が自分ひとりしかいない中で、効率的な診療を工夫している。衛生兵を使って運び込まれる負傷者の重症度を判定して並べ、治療を必要とする順番に診ていくトリアージの考えの導入や、薬品不足の中での消毒方法などは、まさに戦場の医療行為を災害医療に応用したものと考えられる。

救助・救命に続き、岡田菊雄さんがインタビューの中で述べられているように、道路上へ倒壊した家屋の片付けが地震発生当日という非常に早い段階で明治基地の兵隊によって行われている。これにより自動車あるいは牛車や大八車などが道路を通行できるようになり、被災地域の復旧復興を早める上で大きな効果があったと考えられる。しかしながら、この道路の片付けも、救助活動同様に限定的なものであった可能性が高い。大きな被害を受けた明治村和泉集落で被災した鈴木敏枝・杓名美代さん姉妹は、全壊した自宅を家族だけで片付けたと証言しており、軍隊による公的な援助などは記憶にないという[木村・林(2005)]。また城ヶ入集落で被災した岩瀬繁松さんも自宅の片付けは親族だけで行い、明治航空基地からの援助はなかったと記憶している。これらのことから、明治航空基

地の兵隊が基地周辺の全ての道路のガレキを片付けたわけではなく、基地にとっての必要性が高かった道路のみを片付けていたと考えるのが妥当であろう。では、どのような必要性があったのだろうか。現段階で最も可能性が高いのは、基地への物資輸送ルート確保である。多くの飛行機を保有する明治航空基地では大量の航空燃料を消費しており、その燃料は燃料廠から名古屋鉄道の米津駅まで鉄道で送られ、米津駅でドラム缶のまま軍用トラックに積み替えて基地に移送されていた[鈴木(2003)]。「兵隊さんに片付けてもらった」と証言している岡田菊雄さんが居住していた根崎集落はまさにそのルート上に位置している。

三河地震では県の手配による「工作隊」が組織され、県下の地震被害が少なかった市町村の大工が明治村をはじめとした被災地に派遣され個人住宅の建設を行っている。時期は地震発生から2ヶ月後の3月10日からの2ヶ月間であった(『碧海地方震災緊急復旧工事勤労挺身隊出動要綱』・安城市史編さん室蔵)。しかし、岩瀬繁松さんから複数の証言によれば、この工作隊は完成した家を建てたわけではなく、専門的な技能が必要となる柱をたてて屋根組みを作るところまでがしかおこなっていない。家を完成させるためには、壁を作り屋根をふく作業などを、被災者自らが行わなければならなかった。

しかし、岡田菊雄さんの家では、家の壁などを下宿に来ていた兵が休みのたびに作ってくれたことで、家屋の再建がスムーズに進んだ。これは、「下宿」という制度による結果であり、この制度による兵の派遣が家屋の再建にあたって重要な役目を果たしている。下宿制度とは当時の海軍基地で広く行われていたもので、下士官や兵が休日などを地域の家庭で過ごすものである。明治基地周辺でも実施されており、各家にきまった兵が数名ずつ立ち寄っていた[安城市歴史博物館(2004)]。当時の日本の多くの集落では、戦争で若い男を取られており、家を作るといった力仕事の担い手が地域に不足していた。明治村においても同じ状況であったが、海軍基地の兵が多数いたことが他の町村とは違った状況であり、潜在的に地域内に労働力を持っていた。

しかしながら基地と地域社会を結びつけるものがなければ、この兵が地域社会の一員となって活動することはない。下宿制度があったことで基地の兵が地域社会と連携するきっかけとなり、その結果、兵が日頃世話になっている人たちの身を案じて現場にかけつけ、地域社会の力仕事の担い手となったものと考えら

れる。

下宿制度は下士官や兵の精神的安定、地域と基地との一体化などの利点があったと指摘されており[安城市歴史博物館(2004)]、このような制度が、災害時の軍関係者による円滑で継続的な地域支援の基盤となったものと考えられる。ただし、もし三河地震が発生していなければ、下宿の兵は休みのたびに食事などをもらいにくるだけの存在であったことも否定できず、市民の側からはあまり評価されない制度であった可能性もある。災害時に戦力となる人々が平常時から合理的に地域社会と連携するための制度作りは今日的な課題でもあろう。

三河地震の約20年前に発生した関東大震災では、地震の翌日には被害がなかった群馬県や栃木県から多くの救護団が東京に向かっている[鈴木(2004)]。この事実からすれば、戦時下の報道管制がなければ、三河地方の惨状がすみやかに周辺地域に伝えられたはずで、東海道本線をはじめとする被災地への交通機関は地震当日には運行が再開されていることを考えても、名古屋をはじめとした近隣地域から相当な数の救護団の派遣が可能であった。

しかし、戦争と報道管制という事態が、被災地内のみでの災害対応を余儀なくさせた。被災地内では、自己完結的な機能を備えた海軍基地が災害対応従事者となり、さまざまな問題はあるものの一定の効果のある災害対応がなされたことも、今回のインタビューから再確認された。軍は災害対応を主目的とした組織ではなく、また現代とは時代背景も全く異なるため、現代の災害対応で重んじられる「公平さ」[林(2003)]という視点がここでは全く見られない。そのため、本稿で記した災害対応のあり方について、一律的に現在の災害場面に適応させて考えることはできない。しかしながら、「被災地内が孤立してしまったとき、被災地内で地域と結びついている自己完結的な組織が効果的な災害対応を行った」という事実を、本調査では抽出することができた。

2004年新潟県中越地震の例にあるように、現代においても、一部の被災地が孤立してしまい、被災地内だけで災害対応を行わなければいけない事態が存在する。現在、各地域において自己完結的な組織はさまざまな形で存在するが、これらの組織が災害時に効果的に働くのか、またこれらの組織に効果的な活動を行ってもらうためには、日頃から地域と組織間でどのような関係にあるべきなのか、今後検討を進めていきたいと考えている。

§5. まとめ

本研究ではインタビュー調査を行うことで、1945年三河地震の災害対応の様子、特に被災地の中心にあった海軍明治航空基地の地域支援の様子的一端を明らかにした。軍基地は自己完結的な機能を備えており、航空機の整備・操縦から、食料備蓄、医療、木工工作などまで基地内にその機能がある。このような組織は災害にはもともと強い。そして三河地震では明治基地内において物的・人的被害がほとんど発生しておらず、基地内の災害対応をする必要がなかった。このことによって、明治基地のもつ災害対応能力を地域社会へ振り向けることが可能となったといえる。しかしながら、その支援の範囲などは基地の都合に大きく左右されていると考えられ、公的な災害対応に求められる「公平さ」への配慮はなされていない。また、戦時報道管制がなければ、周辺地域からの相当な規模の救護活動がなされていた可能性も高い。災害とその対応には、地震動の強さという自然的要因、家屋の強弱という物質的要因のみならず、その時代の社会構造が大きな影響を持っていることが示された。

現代社会においても、被災地内が孤立するケースはみられる。その時に被災地内にある自己完結的な組織は効果的に働くのか、そのためにはどのような条件が必要なのかを検討することは、防災にとって重要なテーマである。この研究から得られた事実はその基礎資料として大きな意味を持っている。

謝辞

本研究を開始するきっかけは、2004年7月から9月まで安城市歴史博物館で開催された企画展「戦争のなかに生きる」である。同企画展の担当であった斎藤弘之学芸員には、明治航空基地について地元の博物館ならではの様々な話をお聞かせいただくとともに、資料の提供やインタビュー調査の協力者を紹介いただいた。また安城市在住の熊谷善之氏と安城市和泉町内会長の石川嘉弘氏には調査地域や対象者選定などで大変お世話になった。インタビュー調査で協力いただいた愛知県碧南市在住の小林清氏、同安城市在住の岩瀬繁松氏、岡田菊雄氏、早川ミサコ氏、同尾張旭市在住の小山敏夫氏には幾度にわたるインタビュー調査に快く応じて頂いた。愛知県立芸術大学の阪野智啓画伯と藤田哲也画伯には、多大な時間をかけて震災体験の絵を描いていただいた。査読者の山下文男氏と編集者の林豊氏には有用なコメントを頂き、本論文を改善することができた。これらの

方々に深く感謝いたします。

文 献

- 安城市歴史博物館編、2004、戦争のなかに生きる戦時下の日常生活と明治航空基地、安城市歴史博物館企画展図録、123pp.
- 中日新聞社会部編、1983、恐怖のM8 東南海・三河大地震の真相、中日新聞社、306pp.
- 林春男、2003、いのちを守る地震防災学、岩波書店、184pp.
- 飯田汲事、1977、昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布、愛知県、120pp.
- 飯田汲事、1978、昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布、愛知県、96pp.
- Kikuchi, M., Nakamura, M. and Yoshikawa, K., 2003, Source rupture processes of the 1944 Tonankai earthquake and the 1945 Mikawa earthquake derived from low-gain seismograms, *Earth Planets Space*, **55**, 159-172.
- 木股文昭・林能成・木村玲欧、2005、三河地震60年目の真実、中日新聞社、218pp.
- 木村玲欧・林能成、2004、地域の被災体験を収集し共有するための手法開発－東南海地震と三河地震を例とした愛知県三河地域での取り組み－、*震研技報*, **10**, 12-20.
- 木村玲欧・林能成、2005、被災体験の絵画化による災害教訓抽出・整理手法の提案－1944年東南海地震・1945年三河地震を事例として－、*歴史地震*, **20**, 91-104.
- 明治村史編纂委員会、1966、明治村史、838pp.
- 杉戸信彦・岡田篤正、2004、1945年三河地震の地表地震断層、*活断層研究*, **24**, 103-127.
- 鈴木淳、2004、関東大震災、ちくま新書507、232pp.
- 津屋弘達、1946、深溝断層(昭和20年1月13日三河地震の際現れた一地震断層)、*地震研究所彙報*, **24**, 59-75.
- 鈴木丹、2002、明治基地誕生の経緯とその戦後、*安城市歴史研究*, **28**, 127-139.
- わすれじの記編集委員会、1977、わすれじの記－三河地震による形原の被災記録－、三河地震記念事業奉賛会、264pp.
- 山下文男、1986、戦時報道管制下隠された大地震・津波、新日本出版社、326pp.